

# 猫 蓑 通 信

第 108 号  
第 109 号  
合併特大号  
平成 30 年  
(2018 年)  
1 月 10 日発行  
(年 4 回発行)

## 明雅先生の連句採点法

青木秀樹

猫蓑会が創設されたのは一九八二年四月。朝日カルチャーセンターでの東明雅先生の「連句入門講座」の受講生が、連句実作の場として、明雅先生を主宰に戴いて設立した。以来三十五年、明雅先生をはじめ多くの方が故人となられました。一方で新しく入会される方も多く、喜ばしいことです。明雅先生を各種の書物でしか知らない方が増えているので、先生が目指した連句について随時記していきたいと考えます。

今回は明雅先生の『季刊連句』第二号（一九八三年九月）に書かれた「私の連句採点法」から抜粋引用し、連句評価についての四つの要素を紹介します。

「連句の文学性が、①一句一句のおもしろさ、②前句と付句との付心、付味のおもしろさ、③三句目の転じのおもしろさ、④一巻全体の序・破・急のおもしろさにあることはかねがね述べて来ている通りである。」

「一巻の鑑賞は、まず④から入る方がよい。それは先に全体を見てから細部に入る方が狂いがいいからである。」

「次に④と最も関係が深いのは①の一句一句のおもしろさである。」連句は新しくして深みがあって表現がすばらしく、それに俳味やあわれ・しおりがあ

れば必ずその句が絶対によいとは言えない。何故言えないのか。それは、もし、そのような句がよいからと言ってそのような句ばかりが五句も六句も続いたらまた一本調子で一巻のおもしろさが無くなってしまうからである。一巻には地の箇所と文の箇所があるべきである。（中略）すばらしい句が出ると、それにつられて次にもそれに匹敵するような力づよい句が出て、いわゆる一巻のヤマ場を作ることが多い。そのような箇所が折に二ヶ所か三ヶ所あるのは上々の作品であるが、その切り上げ方が問題なのである。」

「②の付心・付味、これこそは連句の文学性の中心である。」「疎句に秀句多しと云って、前句と付句の関係が遠いのが理想とされている。」「前句と付句との間を離せば離すほど良いのかという（中略）前句と付句が殆んど無関係になつてしまうのも困るのである。そして、害はむしろ、この離れすぎの方が大きい。」

「最後に③の転じであるが、この三句の転じの中心は人情自・他・場の関係であろう。（中略）決して難しい法則ではない。」「主旨が変化にあるわけであるから、変化さえついているならば、敢て（自他場に）拘泥する必要はない。要するに先師芦丈翁も言われた通り、よい句が絶対で、規則は従である。」

「連句の主要な文芸性について述べ、（①）④に各二十点ずつと、恋句に十点、計九十点、配点して来たが、百点満点とすれば尚十点余っている。そして、

### ●目次●

第百四十一回例会藤祭興行作品 二十韻八巻	2
奉納直会興行二十韻	4
執筆を終えて	5
佐々木有子	5
佐々木有子	6
亀戸天神社藤祭奉納正式俳諧二十韻	7
奉納正式俳諧配役	7

### 2017 第二十一回えひめ俵口連句大会特集

えひめ俵口の記	8
奥野美友紀	8
第二十一回えひめ俵口連句大会入賞歌仙三巻	10
歌仙「葡萄かな」	10
鈴木千恵子 捌	10
歌仙「朝顔や」	10
鈴木千恵子 捌	10
歌仙「煩惱は百八」	11
鈴木美奈子 捌	11
第二十一回えひめ俵口連句大会 審査講評	11
鈴木了齋	11

### 第二十七回猫蓑同人会作品 歌仙七巻

下蔭三吟（下） 第三歌仙	14
第四歌仙	14
第五歌仙	14
増田龍雨	14
根津蘆丈	14
中村竹邨	14
下蔭三吟跋	18
根津蘆丈	18
中村竹邨	18
下蔭三吟（下） 解題	19

### いなみ全国連句大会 2017 入賞歌仙一巻

歌仙「盆の花」	19
鈴木了齋 捌	19
事務局だより	20

その十点を私は一巻を通し余情としてのあわれ・しおりをもつ作品に対して差し上げよう。」  
おおむね以上ですが、明雅先生が連句一巻の面白さを、いかに大切にしておられたかが分ります。

業平の座

二十韻「撫牛の眼」 鈴木美奈子 捌

藤房や撫牛の眼のやはらかき 美奈子  
 蝌蚪群るる池よぎる漣 了齋  
 春障子ふはりと上着脱ぎすてて 佳之子  
 次のページをめくるアルバム 久美  
 国際線搭乗口に冬の月 明子  
 年末賞与で指輪贈らん 正夫  
 剽軽なあいつが胸に棲みついで 佳  
 影絵芝居の悪い王様 齋  
 続々と軍艦集ふ日本海 夫  
 さつと炙りし干鰯の腹 明  
 ナオ 焼酎は芋だ麦だとかしましく 齋  
 みな十五歳同期会では 久  
 あちこちに付箋傍線文庫本 夫  
 恋といふ字は変と似てゐる 齋  
 満月に毛が生えてくる奴に惚れ 全  
 肌寒い日は抱かれたくなり 明  
 ナウ 遊びたいまだ遊びたい虫時雨 久  
 薄暗いとも薄明りとも 齋  
 十字架の丘へと続く花の路 夫  
 レタスをはさむ香りよきパン 久

押上の座

二十韻「白寿まで」 吉田酔山 捌

白寿まで会ひに来よとや藤古木 酔山  
 麗らかに句座囲む幸せ 郁子  
 軟東風に出掛けの衣裳思案して 文子  
 パンの匂ひのかぐはしき店 雅子  
 マウンテンバイクの子等の波む噴井 豊美  
 月の社に守宮聞く刻 全  
 見られてるかも知れないわどうしよう 雅  
 好きと言へずにわざといぢめる 文  
 教育勸語変なところで生きてをり 郁  
 かめの子タワシいまだ現役 雅  
 ナオ 朝ぼらけ味噌汁の味うれしくて 豊  
 一葉の忌に歩く菊坂 雅  
 水茎の跡うるはしき文の束 文  
 美術展には裸婦のデッサン 雅  
 東に昇れる月と交はず杯 郁  
 祇園の舞妓照葉てふ名で 豊  
 ナウ 縁側に猫とじやれあふ元議員 山  
 糖尿病の予備軍となり 雅  
 名刺の裏を覆ふ花爛漫 文  
 谷から谷へ渡る鶯 執筆

本所の座

二十韻「吟声響く」 棚町未悠 捌

藤の香や吟声響く天神社 未悠  
 甲羅干す亀のどらかな池 通齋  
 春火鉢かざす手の平赤らみて 遊眼  
 メトロノームで曲を速める 利子  
 凍港を離れる船を照らす月 秀樹  
 ぬるめの爛が好きといふひと 眼  
 裏口をそつとくぐつていい男 樹  
 国会問答世間さわがす 利  
 漱石のアンドロイドと握手する 眼  
 今朝の富士山少し不機嫌 利  
 ナオ 御柱祭命をかける氏子達 斉  
 縁台将棋麻羽織りつつ 全  
 片思ひ意馬心猿の滾りくる 利  
 百人一首さまさまの恋 樹  
 月の面銀河鉄道ふと通り 眼  
 岬の果に秋思重ねて 樹  
 ナウ 新蕎麦を打つたと妻の自慢気に 悠  
 グランドゴルフ耽る老人 悠  
 墨堤を緋色に濡らす花の雨 利  
 指さす彼方初虹の橋 斉  
 眼

柳島の座

二十韻「藤浪の」

若林文伸 捌

藤浪の色香を移す懐紙かな 文伸  
 春の袷のひびく吟声 路子  
 初諸子家伝の味に炊き上げて 童子  
 地酒二升を包む風呂敷 有子  
 月の庵訪ふマタギ銃を背に 吉文  
 内陸鉄道歌女の鳴く駅 伸  
 薩摩路の梅檀巨木実のたわわ 路  
 婿殿よりも結納の使者 章  
 あの時に恋の限界越えたかも 有  
 東海とんほに落ちるノドン・テポドン 吉  
 ナオ半ズボンパゴダに祈る人もゐて 伸  
 噴水周り園児戯る 路  
 ごりごりと薬研播りなる惚れ薬 章  
 なついで困るお隣の猫 有  
 着ぶくれのラヂオ体操老ばかり 吉  
 湯舟で語る霜焼の月 路  
 ナウ後生こうせいは棋会の王者指し負かし 伸  
 順番を待つ拉麺の店 章  
 大将の氣つ風の良さよ花の宴 有  
 工場街の暮るるのどかさ 吉

連衆 倉本路子 市橋章子 佐々木有子  
 永田吉文

太平の座

二十韻「藤房の」

間瀬美美 捌

藤房の招く光や池の面 美美  
 梢からふる鶯の声 蕉肝  
 春炬燵カード遊びに興ずらん 淳子  
 油断できない手品師の指 俊子  
 月白の窓に背ける洗ひ髪 アンズ  
 勉強嫌ひ学校大好き 淳  
 斟酌も付度もただ妻のため ア  
 赤坂見附かはる信号 芙  
 東宮御所新上皇のお住ひに 俊  
 過ごさせ給へ日向ぼこして 淳  
 ナオ着ぶくれて駆け寄つてくる幼子等 俊  
 インカ文明絶えて久しき 蕉  
 海峡の彼方に望む未知の海 ア  
 貝の指輪で契りたる夜 蕉  
 無理やりに泣かせて獲つた恋の月 淳  
 迷路の奥に秋風が吹く ア  
 ナウさんま焼く火加減できぬIH 俊  
 思ひもかけずイグノーベルを 蕉  
 大寺の鐘の音遠く花万葉 芙  
 いままでゐたかふらこの揺れ 淳

連衆 近藤蕉肝 上月淳子 三木俊子  
 松島アンズ

錦糸の座

二十韻「東風吹かば」

西田一枝 捌

東風吹かば亀も歌詠む神の池 一枝  
 笙の調べに揺るる藤房 孝子  
 山笑ふ「大」の人文字校庭に 敦子  
 空に向かつて開く手のひら 霞  
 父と子の縁台将棋月昇る 昭  
 浴衣の袖で隠すうそ泣き 孝  
 キヤナルには唾へ煙草と捨てた恋 全  
 レストルームにちびた口紅 霞  
 反戦の声も時代に流される 孝  
 我慢できない霜焼の指 霞  
 ナオ郵便夫スノーモービル滑らせて 敦  
 嫁入支度怠りの無く 昭  
 金猫のすり寄つて来る名古屋帯 孝  
 不老長寿の嫦娥瘦せたり 霞  
 松ぼくり踏みつつ参る阿弥陀堂 昭  
 今年の米で醸す辛口 昭  
 ナウ大リーグイチローも頑張つてゐる 全  
 マイナンバーは抽斗の中 昭  
 手にとりて愛づるも花の道具市 孝  
 うたた寝の夢醒ます囁 霞

連衆 坂本孝子 武井敦子 高塚霞  
 松原昭

平成二十九年四月二十六日  
於 亀戸天神社

横川の座

二十韻「縁を結ぶ」 高山鄭和 捌

長藤や縁を結ぶ太鼓橋 鄭和

行き交ふ人の歩みのどらか 泉子

白子干手焼の皿にもりつけて 市野沢弘子

地元生まれがご自慢の喉 転石

賑はひの酸漿市を覗く月 松原弘子

山雀の籠こはごと開け 石

驚かすつもりはないが君が好き 泉

教師と生徒禁断の恋 松弘

なぜかしらダンクシュートは入らない 石

左目よりも見えぬ右の目 市弘

ナオ 啄木が咳こむ夜の明石町 石

猫もせぬのに猫犬を飼ふ 松弘

ケータイもスマホも何も持たぬ彼 市弘

俺の奴隷と縛るドラキュラ 石

月の舟親指姫に添寝して 泉

高潮来ると村の婆様 全

ナウ 文化の日貯金はたいした燕尾服 松弘

叩る大酒うからやからと 全

造幣局行きつ戻りつ花万葉 市弘

春夢のかげらポケットの中 石

連衆 青木泉水 市野沢弘子 林 転石  
松原弘子

亀戸の座

二十韻「藤揺るる」 江津ひろみ 捌

一陣の風に水面の藤揺るる ひろみ

ベンチに座る背の暖か 千恵子

広縁の団扇貼る声賑やかに 健

前へ前へと歩みゆく鳩 節子

ウ 行軍の兵士の列に夏の月 富子

ビールの泡に君の俯 千

思ひ込め打つたメールの文字化けす 健

般若心経細筆で書く み

付度を野党与党も口にして 節

期待以上に旨い手料理 富

ナオ 氷海に乗り入れんとて北の旅 健

強く櫓引くエスキモー犬 千

赤い糸結ばれてたの前世から 全

江戸小紋脱ぐ姉に似た人 節

玉兔いま響くロックに酔ひしれて 全

木の葉かつ散る夢のまにまに 健

ナウ 美術展中吊り増えるJR 富

学校給食地産地消で 節

天界の城巡りつつ花の山 健

詩集を閉づる春の夕暮れ 富

連衆 鈴木千恵子 由井 健 長坂節子  
名古屋富子

二十韻「奉納や」 佐々木有子 捌

奉納や新樹の深き天神社 有子

夏の燕の過る広前 雅子

コーラス部移動のバスの賑やかに 未悠

三食足りてあとは間食 秀樹

ウ 真夜の月計理簿にらみ残業中 ひろみ

どんぐりどれも同じ顔なり 樹

肌寒の出会いひは留学説明会 雅

セーヌの岸で突然のキス 悠

付いてきた子犬家族の一員に み

代替りする角のしもたや 樹

ナオ ストープは集へる人の核となり 全

戦火を逃れ雪山の月 有

骨折の足引きずつて急ぐ駅 悠

今欲しいのは逞しき胸 雅

飲めぬ酒呷り一層大胆に 全

定年後には妻と農業 全

ナウ 火星にもあの恐竜が居るかしら 樹

羽音かすかに飛べる蜜蜂 み

花筏水の流れのそのままに 雅

春の帽子のリボン軽やか 悠

連衆 武井雅子 棚町未悠 青木秀樹  
江津ひろみ

## 不安と楽しみ

……正式俳諧執筆のお役を終えて  
佐々木有子

「え、引き受けたの！」さんさん考えた末に執筆をお引き受けした時の、母の一言です。

そうです、無理もないのです。自分でもまだまだ早いと思っていたのですから。最初に執筆のお話を頂いた時に、もっとふさわしいベテランの方が大勢いらつしゃるので、そういう方にとお願いしたのですが、正座が難しい、立つたり座ったりが大変、などの理由で、結局お鉢が回ってききました。

伝統的な所作や振舞を全く学ばずに来たのに、執筆の大役が務まるのか不安でしたので、正式俳諧の手順を記した資料を繰返し繰返し読み、貸して頂いた過去のDVD映像を何度も見て、ひたすら頭に叩き込みました。マンションのシアタールームや近くの地域センターの和室を借り、袴を着けて文台を使って、本番さながらの練習練習。でもやはり脚が痺れないかという最大の不安は消えませんでした。

平成二十八年十月十九日、お当番の方々と事務局チーム等での準備、会場設営、そしてお稽



亀戸天神社神楽殿での、執筆の文台捌きの所作。満尾後に懐紙を綴じるための水引をあらかじめ確かめる





執筆登場に先立ち、花司が花を活け、菅公像に供える。見守るのは、手前から奥に、宗匠、脇宗匠、老長

古が終わると、いよいよ本番です。「いつか執筆をやる時があれば、その時のために」と先輩から頂いた山吹色の着物と、母の袴を着けて、十一時過ぎに正式俳諧が始まりました。転ばないように、そして大きな声で、ゆったりとした所作を心掛けました。歌膝の下になる右脚の膝から下に、クッションとして梱包用のプチプチ（正式名は『気泡入り緩衝材』だそうです）を巻くなど、工夫して臨みましたが、残念、結局



宗匠に呼び出され、執筆（右端）登場、着座

脚が痺れて、立つのに時間がかかってしまいました。練習では上手くいっていたのに……。

平成二十九年四月二十六日の藤祭正式俳諧は、亀戸天神社の神楽殿での立礼式です。歌膝の必要は無いので、脚が痺れる心配は要りません。観客の方がずらりと並ぶ中、聞いて頂けるように大きな声で、と肝に銘じました。下から舞台が見やすいよう、床几を八の字に並べてく

### 第三十一回 亀戸天神社藤祭奉納正式俳諧

#### 俳諧之連歌 二十韻

草青む人と人とを繋ぐ橋 生生庵秀樹

世は平らかと亀も鳴くらし 文子

北窓を目覚めのやうに開きぬて 了斎

愛誦の詩の浮かぶ一節 千恵子

ウ 離陸せる翼に夏の月を乗せ 美奈子

烏賊火遙かに影の寄り添ふ 健

ゆたかなるアフロディーテに君は似て

ロッカー奥に恋文の束 美恵

折紙の色取りどりに折られゆく 路子

ふとよみがへる母となりし日 明子

ナオ ぽつこりと臍腑にしみる十夜粥 ひろみ

へつつい猫のねまる厨房 雅子

同期会ふたりの噂尾鰭付き 遊眠

ミスキャンパスは未だ健在 文伸

月を呼ぶ瀧夜叉姫の指の先 霞

庭にほろほろ萩のこぼるる 転石

ナウ 秋場所の初優勝を遂げる夢 俊子

仕事の後は盃を傾け 弘子

風神と雷神が踏む花の雲 富子

なびかせて行く春のスカート 執筆

平成二十九年四月二十六日 首尾

亀戸天神社神楽殿に於いて興行



大丈夫、執筆はちゃんと笑顔です。左は花の句を詠む宗匠。もうすぐ満尾

ださったり、鈴木千恵子さんの解説がわかりやすかったり、のお陰で、観客の方々にしつかり見て頂けたと思います。千恵子さんの解説を聞きながら、タイミングを計って吟声をしたのも

楽しいことでした。写真を撮って下さった由井健康様に、笑顔で、と言われていたので、時々思い出したように笑顔になっていた筈です。

二回の正式俳諧興行がどちらも  
 天氣に恵まれたのは、ありがたい  
 ことでした。恩師の緑華亭孝子宗  
 匠には、隣で色々ご指導ご助言を  
 頂き、そして何より二度にわたっ  
 てこの上ない花の句を頂き、本当  
 にありがとうございました。出来  
 上がった二十韻も素晴らしく、生  
 涯の宝物になりました。皆様から  
 佳句を頂きましたことに感謝申し  
 あげます。下俳諧の折に句を細か  
 く見て下さった鈴木了齋様、文台  
 「左沢」をお持ち下さった武井雅  
 子様、陰から支えて下さったお役  
 の方、お当番の方、事務局チーム  
 の方、皆に着付けをして下さった  
 名古屋富子様、そして当日お手伝  
 い頂いた方々、本当にありがとう  
 ございました。心より御礼申しあ  
 げます。皆様のおかげで無事に済  
 んだと、天国の友と先輩にも報告  
 しました。

これからは明雅先生のお志の一  
 端でも担えるよう、俳諧の道に一  
 層精進しなければと、改めて心し  
 た次第です。

亀戸天神社藤祭正式俳諧配役

- |       |      |       |       |       |       |      |       |      |       |
|-------|------|-------|-------|-------|-------|------|-------|------|-------|
| 宗匠    | 脇宗匠  | 執筆    | 知司    | 副知司   | 座配    | 花司   | 配硯    | 全    | 老長    |
| 緑華亭孝子 | 橘 文子 | 佐々木有子 | 武井 雅子 | 若林 文伸 | 松原 弘子 | 林 転石 | 内田 遊眼 | 高塚 霞 | 倉本 路子 |
|       |      |       |       |       |       |      |       |      | 鈴木千恵子 |



興行を無事に終えて、配役、スタッフ一同、ご神職を交えて記念撮影



## えひめ俵口の記

奥野美友紀

四月二十八日、富山発の便で羽田に着く。到着階からエレベーターで出発階に下り、松山行きの搭乗口へと向かう。

乗り継いでも窓の外は雲の海で、下界の地形を確認することはできない。少しまえ子どもが、理科のプリントに雲の名前を書きこんでいた。いま一緒に窓の外を見ることができたら、すぐにわかるのに。もくもくした雲、さっと刷毛で描いたような雲、どの雲にも人間が名前を付けているのだろう。富士山が顔を出しているのはわかった。

機内誌をめくったり、文庫本の続きを読んだりしているうちにアナウンスがあった。まもなく松山空港である。

愛媛には行ったことがなかった。そもそも四

国に行ったことがなかった。しかし恩師が宇和島の人であったり、愛媛にゆかりの知人が何人かいた関係で、地理的環境の違い、言葉また氣質の違いなどについてはよく聞いていた。温暖な気候もゆかしく思われた。

連句をはじめてからは、「俵口」の松山という意識も生まれた。私は一度しか応募したことがない（実は今回も応募はしていない）のだが、しばしば富山の仲間から、楽しそうな道中記を聞いていたからである。

三月の上旬、鈴木千恵子さんから俵口行きのお誘いをいただいた。千恵子さんが捌として応募された両吟の二巻がいずれも入賞したそうだ。南海放送賞の一卷「葡萄かな」は杉本聰さん、俵口賞「朝顔や」は私が連衆である。光栄なことだ。それで私も、そのお誘いに乗ることにした。

せっかく行くのだから、なかなか行かれない場所にも行ってみることにした。

私は日本近世文学を勉強している。主な研究対象は十八世紀の文人・建部綾足である。綾足も伊予に行っていて、その旅の様子は「浦づたひ」という紀行文にうかがえる。当時、綾足は俳諧師・涼袋として名を知られていた。「浦づたひ」には第四十四番札所・大宝寺の芭蕉塚に触れた箇所があり、また第四十五番・岩屋寺には、「遍路第一の霊所也とて、人もすゝむるほどに」綾足も籠った。これらの霊場に、私も行きたいと思った。

松山空港でレンタカーを借りる。久万高原町

にある岩屋寺まで、空港から車で一時間半ほどかかるらしい。そして岩屋寺は四国霊場で唯一、車で横付けすることのできない場所にあるという。けっこうな山の中を走っていく。これは富山なら立山山麓・芦峯寺や粟巣野あたりの雰囲気か、いや、そこまで険しくなく緑のこんもりとした感じは、五箇山のイメージに近い。旅に出ているのに自分に身近な景色と結びつけている。そしてそういうけっこうな山の中の道を、平日であるにも関わらず、遍路笠をかぶってひとり歩いていてる人が、ほんとうにいるのだと知る。

ふもとの小さな駐車場に車を止め、岩屋寺まで山を登っていく。細い道は舗装してあるものの、急で、息が切れそうだ。つづら折りの坂を登ると、お堂の脇には岩壁がすぐ迫っていた。

詣でる人たちはお賽銭ではなく、札のようなものを入れていた。きまりがあるらしい。予習不足である。「お接待」として、冷やしあめやキャンディーをいただいた。こういうときだけは私もお遍路さん風だった。

寛延三年（一七五〇）、岩屋寺での綾足（涼袋）の句。

山雀も割つて供する岩屋かな  
谷底の杉も千尋や秋の風

（浦づたひ）

大宝寺経由で来た道に戻り、松山駅前に出た。レンタカーを返却し、路面電車に乗る。途中、路面電車と電車の軌道とが十字に交わる地点があった。珍しい箇所だと後で知った。千恵子さ



んは、青木秀樹会長と同じ飛行機だったそうだ。道後温泉でお二人と合流して、しばらくお茶をご一緒した。

もうひとつ、私には愛媛に行ってみた理由があった。下江花留化さんとの縁によってである。

愛媛出身の下江さんとは、あるケアラーズカフェがきっかけで知り合った。ケアラーとは、仕事としてではなく、家族など近親者の立場で介護などに携わる人をいう。認知症を代表とする高齢者の介護についていわれることが多いのだが、限定的ではない。さまざまな障がいを持つ人（子ども）の家族、育児中の人なども広くケアラーに含まれるといつてよい。

私たちのきっかけは、富山県砺波市にある「みやの森カフェ」である。その活動を一言でいえば、「居場所づくり」ということになるだろう。生きづらさを抱えた人たち、ケアラーの人たちに、おいしいものを食べたり飲んだりしながら、少しでも元気で、そして笑顔でいてほしいという願いのこめられた場所である。

あるとき私は、みやの森カフェのオーナーであるKさんに、連句というのをやっているのだが、なかなかおもしろい、という話をした。近世俳諧は文学であるが、同時に、コミュニケーションツールとしての側面も持っていた。現代連句が、何かのための方法や方便である必要はないようにも思える。そうではあるのだけれども、私が連句を楽しむ中で感じている何かは、

自身の、連句に直接関係しない部分にもなんだか影響を与えているような気がしている。ひとりの人間が関心を持つことであるから、関連があるのは当然といえば当然かもしれないが、たとえば精神科医の神田橋條治氏が書かれた文章（連句と対話精神療法）を読んだりすると、膝を打つ気持になるのもまた事実であったりした。

Kさんはこともなげに、「知り合いで連句をやっている（しかも、おもしろい）人がいる」と言った。俳句や短歌ならまだしも、「連句」という語を人の口から聞くことは日常ほぼないから、とても驚いた。そこで、紹介されたのが下江さんである。下江さんは現在大阪在住であるけれども、SNSのおかげですぐにやりとりがはじまった。

そもそも下江さんは、Kさんの活動を意気に感じ、県外在住であるにも関わらず追っかけのようにKさんを訪ねてきたらしい。彼女自身も、人や場所をつなぐさまざまな活動や、居場所づくりに関わっている。愛媛出身の下江さんはまた、長年、連句に親しんでもいる。その師匠が、主催者のおひとり、選者でもある大月西女さんであった。「花留化」という号も、西女さんの命名によるという。

懇親会で私は、西女さんのテーブルにご挨拶にうかがった。下江さん自身は参加してはおられなかったが、下江さんの名をきっかけに、少し、お話をしてみたいと思った。西女さんのほうもまた私について伝え聞いておられたよう

で、話は早かった。お隣の席の岡田伊勢子さんも、会話を聞くなり、「花留化さんのこと？」と、よくご存じであった。西女さんと伊勢子さんもまた、生きづらさを抱えた若者たちと連句を巻く機会があると聞いた。そこに下江さんはいなかったけれども、花留化さんたる下江さんの話をしたり、また、西女さんと伊勢子さんの関わる活動についてもうかがったりした。

翌日の表彰式では、青木会長の挨拶や、選者を代表して鈴木了齋さんによる審査講評などがあった。青木会長は、「楽しいだけでは連句じゃない」とおっしゃった。猫蓑会員にはなじみのある言葉である。了齋さんは「生活の中の、見過ごしがちな微妙な事柄、小さな事柄、しかししっかりした現実感のある事柄に着眼し、掘い上げて言葉に」することの大切さを話された。どちらも、『俵口』第二十二号にも掲載されているお言葉だけれども、お話としてその人にその場であつたときの響きかたは、また特別であつたと思う。

千恵子さんは二枚の賞状を受けられた。そして、「朝顔や」の賞状を私に下さった。

松山での思い出はまだある。また来たい場所ができたと思いつながら、松山を後にした。富山行き最終便、夜の羽田が好きだ、となつかしい風景のように窓の外を見た。私は私の日常を生きるが、「楽しいだけでは」と問いかけながら、日常と非日常のあいだにあるような何かを、忘れずに見ていようと思う。

第二十一回えひめ俵口連句大会  
入賞作品三卷

南海放送賞

歌仙「葡萄かな」

鈴木千恵子 捌

黒きまで紫深き葡萄かな 子規

宙切のごとく鴟の高鳴き 千恵子

夜学生月に何をか想ふらん 聰

スマホで済ます地図も時計も 聰

縦横に斜めに渡る交差点 聰

触れるやいなや溶ける初雪 聰

ウ 降誕祭緋く古き懺悔録

マリアに決めるけふの源氏名 千

とつときのコニヤック彼に口移し 聰

蒲柳の質と言ひ訳をする 千

店賃を十月溜めても悠然と 聰

判じ絵のある団扇はたばた 千

痩せ犬の草駄天走り夏の霜 聰

マカオを仕切るブックメーカー 千

港口のジャンク数へて小半日 聰

昭和歌謡が鼻唄に出て 千

豆剣士素振りを飾る花吹雪 聰

横断幕に初虹の立つ 千

ナオ 国賓を迎へ礼砲うららけく

放言癖がちよいと気になる 全

北溟に幾千里もの魚棲む 千

夜ごと夜ごとに襲ふ既視感 聰

縄跳びの跳べない足に絡む縄 千

吐く息白き瘦せたおかつば 聰

ランウェイスポットライトの中歩く 千

四つ星ホテル誘ふ付文 聰

君のため薔薇いつばいの浴槽を 千

音色やさしき銅の風鈴 聰

月光にコロボックルの踊りだす 千

古老の鬚に紅葉一枚 聰

ナウ そぞろ寒墨絵の墨の掠れがち 千

選挙演説声はがらがら 聰

学長はフルマラソンを走り切り 千

ふりさけ見れば山ののどらか 聰

金の亀棲むてふ城は花の中 千

ひねもす止まぬ蛙合戦 執筆

連衆 杉本 聰 平成二十八年十一月十六日満尾 文音

俵口賞

歌仙「朝顔や」 鈴木千恵子 捌

朝顔や絵具にじんで絵をなさず 子規

空は開けて浮かぶ有明 千恵子

高速道トンネル越えの爽やかに 美友紀

缶コーヒートのプルタブを引き 千

お揃ひの帽子をかぶる兄妹 紀

観察日記蟻の生態 千

ウ じんわりと熱くなりゆく土用灸 紀

気づいたときは手遅れの恋 千

業平も光源氏も泣いたのか 紀

貴種でなければど流離する性ま 千

スケジュールスマートフォンに入力し 紀

伝言板の消えた改札 千

冬至湯の銭湯の客招く月 紀

留学生もはしやく初雪 千

動物園微動だにせぬハシビロコウ 紀

レッドリストの種類増えたる 千

花の宴古伊万里の皿並べあて 紀

菜飯お澄まし祖母のご自慢 千

ナオ 競漕会終へて両校称へ合ひ 全

地図がなくても迷はない町 紀

長き尾を立てて黒猫パトロール 千

相手次第で変はる声色 紀

本水を客も浴びたる夏芝居 千

葛勝饅頭の葛のぶるぶる 紀

ファーストキス顛へた夜もあつたつけ 千

退屈だから来てと奥様 紀

梱包材つづす指先きりもなし 千

誰に貸したかわからない本 紀

付喪神月のリビング横切りぬ 千

盆の休みを交替で取り 紀

ナウ 手旗振る巡査の頬に秋の風 千

中心線で左右対称 千

ロールシャツハ秘めた一面現れて 千

絡まつた糸うまくほどける 紀

餌やれば鯉の乱せる花筏 千

幼なじみを誘ふ永日 執筆

連衆 奥野美友紀 平成二十九年一月二十七日満尾 文音

俵口賞

歌仙「煩惱は百八」

鈴木美奈子 捌

煩惱は百八減つて今朝の春

漱石

我に許せよ起き抜けの屠蘇

美奈子

鶯のホ音はつきり鳴くならん

庸子

北窓開く頃の山里

清子

土筆とる子らの家路に月まどか

アンズ

コインことりと入れる自販機

雅子

教会の鐘の優しく響き来て

郁子

初浴衣佳き芝居見物

利子

うなじより真白き蛇の嬬やかに

奈

男一匹抽斗に入れ

庸

父を師に蘭亭帖を手習ひに

清

池の面に展く水の輪

ア

黄金の月を間近に草泊

雅

心癒さる清き虫の音

郁

秋場所は日本力士に期待され

利

ポピュリズムはもうご免蒙る

奈

花繚乱トネルやつと開通し

庸

紙風船の七彩の風

清

紙風船の七彩の風

ア

歌膝の絵姿拜し人麻呂恋

雅

読みきれぬ本床の間に積む

郁

河川敷少年野球賑やかに

利

指導と称し口出しの爺

奈

茶を持てはしはぶき三つと心得よ

庸

ローン完済餅配りする

清

名利にどろばう橋と名が残り

ア

猫の首輪に結ぶ恋文

夢の中超モテモテの僕がある

とどのつまりは夫の言ひなり

三方に団子積まるる望の月

カラスミ嬉しぐいとウオッカ

ナウ連山を尾根越に踏み冬近し

鬼無里の御師は忍者なるとよ

弁慶と判官殿の笠と笈

滞りなくまはる回覧

雅

郁

利

奈

庸

清

ア

雅

地震過ぎし故郷の名城花万朶

平成雛に集ふはらから

連衆 久保田庸子 下鉢清子 松島アンズ

武井雅子 東郁子 梅田利子

平成二十九年一月八日首尾

於 柏市加賀ふるさと館

郁

利

### 第二十一回えひめ俵口連句大会

#### 審査講評 鈴木了齋

『俵口』第二十二号より転載

今回は応募条件が脇起だったため、発句の優劣が評価対象にならず、付け合いだけを集中して評価できたことに、選をする上で独特の面白さを感じた。また、脇は捌き手が詠んでいることが多いと思うが、そのためかよい脇句が多かった。

ただ、発句が松山に縁の深い三俳人のものなので、発句の句柄にもよるが、その後の付け合いで松山や、愚陀佛庵など、この三人に関係の深い事柄を詠むと遠輪廻感が強くなる。各折立や月花、拳句などの節目の句では尚更だ。そういう巻がいくつか目に付いた。松山での大会に応募する作品だからといって、愛媛や松山に関連する挨拶句を義務のように組み込む必要はない。募吟への応募は作品作りの第一義的な目的

ではないはずだし、そういう詠み方に本当の挨拶の心があると見えるか疑問だ。

全体に気になったこととして、去年も同じようなことを書いたが、恋句と時事句が一卷の足を引っ張っている例がとても多い。

まず、恋句にありがちな、派手で空疎な常套表現の羅列には、まったく共感できない。「やけどするやうな情熱」「情炎燃やす火の女」「なほ燃えて」「愛の執念」「艶めきて」「甘く誘はれ」「恋の未練」「二人で墮つる恋地獄」「相思相愛」「背徳の堕ちゆく先」「イケメン」「ペーゼ」「止められぬ恋の坂道」などの語句に、本当に恋の実感があるだろうか。こうした常套表現の他に、恋する人とその気持ちに寄り添わず、揶揄したり見下すような句も多い。人の営みへの根本のところでの共感、そこに寄り添う心なしに、魅力的な連句を作ることとはできないと思う。そして恋は良かれ悪しかれ人の営みの華だ。詠み手、捌き手の心が伝わらない時事句も同じだ。(中略) マスコミの受け売りのような批

評がましいことを言えはいいというわけでもない。そうではなく、ちよつとしたものの言い方の工夫だけでも、読者に何かを感じさせ、考えさせることはできる。また連句では、前句への付け方によっても多くを表現出来るはずだが、今回の時事句に好例は見当たらなかった。

恋でも時事でも、たんなる埋草、句数かせぎのようなおぎなりな句は、一卷を台無しにする。今回、すべての作品に二箇所以上の恋があつたが、必須なのは一箇所だけだ。義務的に、心のこもらない恋の場を二ヶ所も作るくらいなら、むしろ一ヶ所でも集中して魅力的な恋を出すよう努める方がずっとよい。蕉門でもそのようなことが言われていた。まして、時事句など二巻に必須の要素ではない。私の師の東明雅先生は、時事句は一卷に必須ではないし、入れてもせいぜい二句まで、それ以上あるのは「おぞましい」とまでおっしゃった。

恋や時事句にかぎらず、あらかじめ決められたかのような展開や要素を、順々に義務的にこなして行くだけの連句は楽しくない。そういう作品では、前句をじっくり味わって付けを考案しているのかどうか疑問と思わせるような展開も多くながちだ。

連句や俳諧について詠んだ句が多いのも気になったことの一つだ。「俳諧に俳諧を詠むべからず」という格言もある。絶対駄目ではないが、よほど工夫しないと、俳諧の世界の中に閉塞したような作者の作品に見えてしまう。

もうひとつ目に付いたのは、後半が平板に

なったり粗雑になつたりして、前半より魅力のない展開になつてしまふ作品が多かつたこと。後半の印象は一卷全体の読後感を大きく左右する。後半が崩れる原因はいろいろ考えられるが、そうなりがちなる事なので、捌き手は十分注意する必要がある。

文法や表記の間違いが時折目に付くのも残念なことだ。これらは、少しでもあやふやな場合はこまめに辞書その他で確認することで多くは防げる。また、捌き手が連衆に校合稿を配布して確認を求め、連衆それぞれが一卷全体をしつかりチェックするという手順をきちんと踏むことが大切だ。それによつても多くの誤りを防げるはずだ。よい作品を生むためには、資質やインスピレーションの前に、こうした地道で基礎的な事柄、あたりまえの努力をきちんと積み重ねることが大切だと思う。その上に立つてこそ、資質もインスピレーションも花開く。

否定的なことばかり書き連ねてしまつたが、もちろん魅力的な作品も多かつた。以下の、特選、秀逸、入選の、計十二巻の作品はその代表だ。

### ●特選二巻

#### ◎「うつむいて」の巻

発句は三冬だが、脇で定まつた季と満尾の日時がどちらも仲冬なので、一座して一気に巻いた作品かと思う。一座して巻いた作品は、時間の制約などで、後半があわたしく崩れてしまうことになりがちだし、逆に文音の場合も永い期間がかかるせいで、感興の鮮度がだんだんに落ち、やはり後半はだれてしまいがちだ。しか

しこの作品は、前半もよく出来ているが、後半ますます充実して面白く読める。どの句もきちんと前句を受けて発想しており、言葉がよく練られ、焦点を絞り込んだ簡潔な仕立てで、しっかりと味わいの句が多い。一句の仕立てが簡潔でも、だからこそ、前後の句との関係で複雑な味わいを生み出して行くのが連句の醍醐味だ。また月、花、恋など、勘所の句や付け合いがよく出来ている。充実した力のある捌と連衆による作品と思われる。

#### ◎「朝顔や」の巻

こちらは、発句の季と満尾日時の季が半年近くずれているので、文音による作品と思われる。文音の作品は、一句一句を考える時間が十分にあるためか、凝り過ぎ、飾りすぎの、作り事めいた句が多くなりがちだが、この作品は前述の「うつむいて」の巻と同様、もしくはそれ以上に、一句一句に抑制が効き、簡潔な仕立てに絞り込まれ、おかげで付け合いの魅力が生きている。生活の中の、見過ごしがちな微妙な事柄、小さな事柄、しかししっかりと現実感のある事柄に着眼し、掬い上げて言葉にしたような「実のある句」が多く、「文音臭さ」がない。また文音は、一座の「乗り」の流れというもののはつきりせず、同じように昂揚した印象の句ばかりが一本調子に並ぶ、いわゆる「夜店のステッキ」状態になりがちだが、この巻にはそのような弊も感じられず、一卷のメリハリも流れもちゃんと感じられる。この巻も、後半が充実し、序破急の「破」の面白味が十分に発揮されている。



また、月花、恋などの句が良く出来ている点も「うつむいて」の巻と共通している。これもまた、力のある捌、連衆による作品と思われる。このように、特選二巻は、それぞれに充実した魅力があり、甲乙付けがたい。

### ●秀逸三巻

秀逸三巻も、長所としては特選二巻に較べて大きな遜色はないと思うが、少しずつ気になるところがあった。注意深く校合すれば、特選二巻に迫ることができると思う。

### ◎「ふろしきを」の巻

魅力的な句、付け合いが多いが、ところどころ気になる点がある。まず脇句、「雲間の月にひとつ進上」というのは、何をひとつ進上するのか。発句の「柿」という言葉に依存して、脇の一句だけ読んだのでは意味が完結せず、理解できない形になっている。脇は発句に寄り添うものだとしても、短歌の下の句とちがつて、一句としての意味は七七だけで自立していなければならぬ。(中略)その他の月の句と、特に花の句はよく出来ていると思うが、ナオの恋はややありがちな句と感じられた。付け筋、付け味のよくわからないところも何ヶ所がある。また、前半に較べて後半がやや低調な気がするのも残念なところ。

### ◎「葡萄かな」の巻

脇句「宙切るごとく鵲の高鳴き」は独特の比喩が面白いが、脇としてはやや面白すぎて、発句と独自性を競う感じ、いわゆる「身柄がある」

ことになってしまった。「ふろしきを」の巻の脇句とは逆だが、これも一巻の冒頭で気になる。この一巻も、月花の句を含め魅力的な句、付け合いが多いが、やはり前半より後半のほうが句も付け合いもやや低調だ。恋も前半、裏の恋のほうが、後半、ナオの恋より面白い。

### ◎「愚陀佛は」の巻

この巻は、秀逸の他の二巻と違い、前半よりむしろ後半に盛り上がりがあると思う。恋の一連も後半の方が面白い。月花その他の勘所の句もそれぞれよく出来ており、一句一句としては面白い句が多いが、全体に、前句との付け味が薄く、関連性がわかりにくいものが多い。凝った句が多いところ、付け味の薄い付け合いが多いところなど、やや「文音臭く」感じられる。(以下、入選七巻についての個別評は略)

### ●転載にあたっての付記

各種の連句募吟に応募したことのない方にとっては、募吟の選がどのように行われるのか謎かも知れない。多少とも参考にしていただければと、この「講評」を転載させていただいた。もちろん、各選者によって、見方、考え方は様々で、これはあくまでも私の見方、考え方にすぎない。

個々の募吟によって細部は異なるが、このように応募作品の中から各選者が、少数の特選、それより少し多くの秀逸、さらに多くの入選など、段階別に作品を選び出す。

それらの評価を、たとえば特選三点、秀逸二点、入選一点、などと点数化し、選者全員の点数を合計して各作品を序列化する。そして基本的には、合計得点総数の多いものから順に「格」の高い賞を授与

し、あるいは入選を認定することになる。

言うまでもなく、文芸作品の価値は、本来数値化できるような性格のものではない。読む人次第で異なる価値を發揮することは当然だ。作品を評価し、特選、秀逸、入選、などに絞り込み、選別するのは、選者にとっても自身が問われる苦しい作業だ。

選者全員による得点合計が最も多い作品を最も優れた作品として認定するのも、あくまで便宜上のこと。募吟を開催し、賞を授与するにはそうするしかないからだ。最終結果には当然異論もあり得る。こうした仕組み上の限界を多少とも補うために選者会議が開催され、「質」の側面も検討するが、「質」というのは明確な結論の出ないものだから、「量」化された得点による結果が覆ることはまずない。

募吟の大会によって内容は異なるが、選者会議では他に、同作者の作品が上位に複数あったらどうするか、選者自身の応募を可とどうか、臨時の特別賞的なものを設定するか、など様々な問題も論議される。いずれにせよ、考えの違う顔ぶれで連句の「質」をさまざまに語り合う貴重な機会だ。

募吟にはこのように限界もあるが、各々考えの異なる選者が複数、共通して高く評価しなければ上位入賞はありえない。上位の作品でもそれを全く評価しない選者ももちろんいるが、それにしても何らかの意味で魅力ある作品だということは確かだろう。

何より、各募吟の入賞・入選作品集に作品が収録されれば、世に問う、とまでは行かなくても、自分の作品を、募吟に応募するようなアクティブな連句人多数に読んでもらうための、現状では最善のチャンスになる。この点で、おそらくは、個人や団体の作品集以上に有効だろう。一月末締切の第二十二回えひめ俵口連句大会を皮切りに、募吟の続く季節がまた新たに始まる。ぜひふるって応募されたい。

二荒山の座

歌仙「水源を」

青木泉水 捌

水源を名に持つ街や桜桃忌

泉水

誘ふ如く梅雨の蛸

了齋

球児らの掛け声高く響きあて

敦子

ひつくり返す赤い自転車

壽子

月見酒竹馬の友と酌み交はし

文伸

熱さこらへて衣被むく

俊子

ウ 秋深し山から女神下りてくる

壽

傘の片側貸した馴初

齋

始まりは羽田終りは成田にて

伸

土産に選ぶ故郷の品

敦

凍蛇のじつと動かぬ二重窓

俊

風は疼けど月は急がず

齋

新記録期待の星は中学生

敦

パンダの赤ちやんメスと発表

伸

オプシオンでちよいと立ち寄る四川省

壽

峯また峯を清流が縫ふ

齋

義仲寺の辞世の句碑に花吹雪

俊

どこの家にも種案山子あり

敦

ナオ 春服を着れば記憶の引き出され

齋

眼鏡のつるを替へる店先

壽

准教授ロードバイクでツーリング

伸

ダンスコンペに励む練習

敦

砂浜の君の足跡追ひし夏

壽

潮の香だけが残る口づけ

齋

くのがまんまと化ける町娘

伸

生姜味噌ならバアちゃんのみ

敦

鑑定で偽と決まった古き壺

齋

教科書通り丸暗記する

壽

礼拝のベールに射せる望の月

敦

おかめこほろぎえんま蟋蟀

伸

ナウ 風炉なごり客は全員古稀を過ぎ

齋

飛び石ひとつピョンと跳び越え

壽

憧れた船旅で見るとオペレッタ

俊

自由自在に動く掃除機

敦

花あはれ凌辱のごと咲かざる

泉

小鳥の卵つつむ掌

俊

連衆 鈴木了齋 武井敦子 杉山壽子

若林文伸 三木俊子

卯の花山の座

歌仙「富士見ゆる」

小池啓子 捌

富士見ゆるはずの場所なり雨蛙

啓子

ビルの谷間に濡つ石竹

香織

コレクター浮世絵整理きりもなし

暁巳

年表を繰る葉しみもあり

文子

初月の入り日を追つて沈みゆく

昭

南瓜もちらへばいつもご機嫌

転石

ウ 村芝居長靴脱いで女形

文

惚れた弱みで宗旨替へする

織

嫁さんはカソリックにて子沢山

巳

ずらりと家に並ぶ自転車

石

公園の太極拳はゆるやかに

昭

サプリメントでおなかいっぱい

織

氷壁の断崖の小屋月傾ぐ

石

眼下の湖をよぎる傘

巳

蔵元は伝統の道誤たず

文

ネズ一本の夢は世界へ

織

三丁目長屋今様花筵

文

厨の浅蜷潮吹いてをり

昭

ナオ 放哉忌渚の石のゆるる音

巳

露天の湯舟独り占めする

織

暴れてるあれはゴジラの影かしら

石

知事の勢ひちよつと失速

織

追ひ風の時の参考記録なり

石

葦の茂みに習ふ羽撃き

昭

ビアガーデン負けじと声を張り上げて

織

めくばせだけで恋は語れる

文

実はなあ些少ながらと持参金

石

助詞の一字を大切に文

昭

山家集月賞づる歌様々に

巳

木の実降るなり語り部の宿

織

ナウ べい独楽のおもひだせない廻し方

昭

お化け煙突あつたこの町

石

横ならびこれで行かうよ御同輩

全

男飯屋の列のしんがり

文

花の雲寺領は旨き米どころ

啓

つかず離れず双つ蝶々

巳

連衆 平林香織 島村暁巳 橘文子

松原昭 林転石

安積山の座  
歌仙「衣残し」  
石川葵 捌

衣残し蛇しなやかに岸根かな 葵  
 浮葉の珠の光る梅雨晴 洋子  
 口笛を吹きつつ子等の集ひ来て 美奈子  
 ケーキカステラ煎餅も出す 未悠  
 月昇る商店街をひと巡り 秀樹  
 影くつきりと角の紅葉 碧  
 万鬼祭トランプマクロン競ひ合ひ 奈  
 恋の年の差なんてえんやこりや 洋  
 君の名は橋でいまだに待つ人が 悠  
 水脈の寄り添ふ一對の鳥 全  
 余り世はこれから難所波荒く 碧  
 凍れる月が我が道標 洋  
 しやんしやんと終相場は上向きに 奈  
 グレンミラーのトロンボーン聴く 全  
 厚木基地コーンパイプの元帥が 悠  
 離島噴火で増える領海 樹  
 仏舍利に有心無心の花の舞ひ 奈  
 フェーン現象見るのは幻 洋  
 ナオ分校に三人だけの菓立鳥 全  
 消防署なく派出所もなく 悠  
 ロボットに掃除洗濯任せをり 樹  
 性善説の夫は健気で 奈  
 夜だけの契約関係濃密に 碧

平成二十九年八月二十五日  
新宿ワシントンホテル 新館・菊の間

お帰りなさいと秘書の艶めく 樹  
 遊び人水母のやうにふはふはと 洋  
 芋焼酎をぐいと飲み干す 悠  
 バッカスが隣に眠る夢の駅 奈  
 ぼきりと折れた俺の胸骨 葵  
 縄文の大甕の水月砕け 悠  
 美術の秋のパステルの青 碧  
 ナウ涼新た豪華列車の旅に出る 悠  
 縁側に読む友の近況 樹  
 OB会なまり言葉の飛び交ひて 碧  
 蜂の羽音もBGMに 洋  
 花の棋士十四才の次の手は 葵  
 未来をめざす風のうららかに 樹

月山の座  
歌仙「至福かな」  
名古屋富子 捌

梅雨寒の一枚はおる至福かな 富子  
 築地の裾を埋める十葉 冬乃  
 新しき師匠見むとて集りて 鄭和  
 うはさ話はずぐに広まる 弘子  
 月よりも高いビル建つ大都会 芙美  
 案内小さい相撲取勝つ あや  
 熊架の実物ちよつと嗅いでみる や  
 今夜は君の胸にビバーク 弘  
 暗号は宇宙を走る恋の文 芙

不安いつばい自動運転 や  
 アベ君の経済特区いかかはし 鄭  
 近くの知人遠い友人 全  
 玲瓏と満月冴ゆる御神渡 乃  
 梟の声響く山々 芙  
 古民家にやうやく開く喫茶店 乃  
 財布の中にたまるレシート や  
 川面から海を目指しぬ花筏 弘  
 母はやさしく春の風邪ひく 芙  
 ナオ義士祭の列到着す泉岳寺 弘  
 写メールばかり送る旅の日 芙  
 この頃は茶飯事のみ家族です 乃  
 当りくじてふ災ひの種 弘  
 麦稈帽飛ばして遊ぶ丘の上 芙  
 海の王子に会ひてそれから 乃  
 セロを弾く指にそうつと口づける 鄭  
 やつぱり秘密酔うて見た夢 や  
 どこまでも藤井四段は進撃す 弘  
 天童温泉お湯は真つ黒 鄭  
 うまさうなもつてのほかを覗く月 全  
 縁の下から蟋蟀の声 富

ナウ裏方も主役も茶髪文化祭 や  
 シエークスピアの生家訪ぬと 弘  
 珈琲の豆の焙煎凝りに凝り 乃  
 湯気も溜まれば雲となるらん 鄭  
 尾根伝ひ花の廻廊花の地図 富  
 ひざの仔猫にあくびうつさる 芙  
 連衆 百武冬乃 高山鄭和 松原弘子  
 間瀬芙美 中林あや

羽黒山の座

歌仙「女庭師や」 江津ひろみ 捌

地下足袋の女庭師や夏なかば ひろみ  
 冷しタオルを巻きつける首 忠史  
 遠き峰珍しき鳥飛ぶならん 一枝  
 特別列車柔らかな椅子 アンズ  
 月の名の馳走味はふ月の宴 有子  
 鎌の祝に家族そろひて 史  
 練習の甲斐あり一等運動会 有  
 恋愛禁止えらいことだね 全  
 べつたりと乳母がついてる王子様 ア  
 驢馬にまたがり交す接吻 史  
 クリムトの金の爛熟世紀末 枝  
 会議は踊る風の月 ア  
 独裁者オンドルの部屋独り占め 有  
 茶道は武士のたしなみとなり ア  
 一呼吸おいて痺れの脚伸ばす 枝  
 ダイエットなど二度としないわ 有  
 床山の鬢付け油匂ふ花 枝  
 国体賛歌春風に乗り 史  
 ナオめかり時午後の授業の意識飛ぶ 全  
 妖精を見る木々の間に ア  
 ガイアとの会話高らかケルト人 枝  
 帆をいつばいに孕ませた舟 史  
 久々の男児誕生鯉幟 有

お百度踏んだ羅の帯も解け  
 恍惚の闇のうは言聞き返す  
 対等合併であつた筈だが  
 記憶なし記録もなしがトップ記事  
 アルツハイマー試す新薬  
 子ども達月の伝説楽しみに  
 流れ星にはしばし黙祷

ナウ涼新た復興進むなみの街 史  
 ミニバン流す懐かしき唄 枝  
 ヒーローに未来の夢を重ねつつ ア  
 書いては消して初の随筆 有  
 花枝垂肩にふんはり触るるほど 枝  
 きしやごぜ貝仕舞ふ妹 有  
 連衆 根津忠史 西田一枝 松島アンズ  
 佐々木有子

山寺の座

歌仙「あやめあやめ」 田中秀夫 捌

あやめあやめ雨呼ぶ言葉口遊む 秀夫  
 水面の渦をかすめ翡翠 健  
 プレスマン望遠レンズ構へみて 孝子  
 小銭を探すポケットの底 霞  
 高原の三角駅舎照らす月 路子  
 身に入みて聞く里の民謡 節子  
 やや寒の酒舌頭に転がしつ 孝  
 美男におはす住職の眉 路  
 待つてゐる女つましく七軒町 孝

絹の下着をそつと手洗ひ  
 緬羊の群追ひ立つる犬の声  
 片割月に畑の冬ざれ  
 旅仲間ストゥ列車に餅焼けば  
 閉店の後自由業なり  
 おみくじの心理作用は否めずに  
 準優勝で悔しがる奴

無伴奏フーガ重たく花の散る 節  
 かはりばんこにふらこを漕ぐ 孝  
 ナオ外為の上下に敏く惜しむ春 路  
 般若波羅蜜多運は気まかせ 孝  
 パワハラ的女性議員のべらんめえ 健  
 鯉は活きて跳ねる船端 孝  
 行水の葭實の影のふくよかに 霞  
 深い畏へと官能の午後 健  
 牝狐のしやぶりつくしたされかうべ 孝  
 領収証を束ね申告 全  
 ジグソーのパズルの一片見つからず 節  
 韓流ドラマ母は語り部 路  
 国境を際立たせたりけふの月 霞  
 えんま蟋蟀ひげを震はす 節  
 ナウ新蕎麦のつゆちよつびりと通ぶつて 孝  
 羽織さらりと脱いで真打 健  
 他愛なき夢に子供は育ちゆき 路  
 いつの間にやら金となる駒 健  
 花万朶思はず使ふ丁寧語 夫  
 寅さん映画に笑ふのどけさ 霞  
 連衆 由井健 坂本孝子 高塚霞  
 倉本路子 長坂節子



黒髪山の座  
歌仙「初蛩」  
佐藤徹心 捌

摩天樓煌き眩し初蛩 徹心  
 ためらひがちに南風吹く 千恵子  
 子供らは積木遊びに夢中にて 郁子  
 手作りドーナツまぶすお砂糖 淳子  
 残業の丸窓過る月の影 雅子  
 かかし立ちたる細き畦道 酔山  
 村芝居誘はるる程地になじみ 淳  
 鉢合せする彼と元彼 千  
 流し目で鼻で笑つてにくらしく 山  
 シヤッター街に生き残るカフェ 雅  
 ジュークボックス選ぶはいつも同じ曲 千  
 かぜから肺炎大事の月 淳  
 人間に近づきすぎると山の熊 雅  
 賢治絵本の挿絵ほつこり 千  
 迫り来るSLの前カメラ据え 山  
 誰かれとなくくばる飴玉 雅  
 これはまあみごと三春の花万朶 山  
 農具市では神棚も売り 淳  
 ナオ 栄螺焼く匂ひ嗅ぎつつ長話 山  
 定期検診辛うじてパス 雅  
 控へめに好みの酒をぐつと呑み 郁  
 感情移入うまい俳優 心  
 船倉に潜む毒蟻の恐しき 淳  
 強い香水しつかりとつけ 山  
 エレベーター素早く盗む甘いキス 淳  
 男のくせに眉を抜く奴 千

そのうちに鼠が猫を追ひかける 雅  
 魔法使ひに弟子入りの夜 千  
 月の道黒装束のハロウィーン 全  
 銀杏黄葉を風がさらひぬ 淳  
 ナウ 枝豆をひとつつまんで絵を仕上ぐ 山  
 床に散らばるチラシ片付け 淳  
 反抗期やうやく過ぎて未娘 雅

第三歌仙  
 芭蕉翁と同じ齡のしぐれ聞く 竹邨  
 かすかす匂ふ山茶花の寂 龍雨  
 池の水人のけはひに波立ちて 蘆丈  
 飼牛の名を何とやら云ふ 邨  
 日のありか月のありかも八重霞 雨  
 海苔の箸焚く酒釜の下 丈  
 よき仏果得たしと涅槃拝むらん 邨  
 対の草履の並ぶ沓脱石 雨  
 許したる心は見もし見せもして 丈  
 尾花かくれに虫のささやき 邨  
 月昏き水門叩く糧の船 雨  
 猿面冠者の智慧怖る冷 雨  
 あちら向く風見鴉に風おこり 邨  
 高いところの一ツ灯が点く 雨  
 巻脚絆草臥足に捲きかへて 丈  
 飯にも交じるトロツコの砂 邨  
 揺籃にいづくの花ぞ散て来る 雨  
 春の日傘の紅ヶ光る綵 丈

下蔭三吟 (下)

増田龍雨 根津蘆丈 中村竹邨

故郷の便り豊漁に湧く 心  
 花の宴甚句聞かせる洩い喉 山  
 髪なびかせてうらかな午後 郁

連衆 鈴木千恵子 東郁子 上月淳子  
 武井雅子 吉田酔山

ナオ 陽炎の長堤曲もありぬべし 邨  
 虚で提ても提子うれしき 丈  
 七人に一人足らねど薫る墨 雨  
 二階二間に矩の手の縁 邨  
 てらてらと若葉盛りの深山鶯 丈  
 米塩たちて眼涼しき 雨  
 荒彫の鑿に仏の生々と 邨  
 水もせせらぐ星川の秋 丈  
 濡々て身は白露の秋の中 雨  
 その萩のよなをんなはらから 丈  
 欠けたとて月に恨が云はれうか 邨  
 定家忌なればかけし歌切 雨  
 ナウ 菓子鉢は味噌松風に越の雪 邨  
 沖の地波の雲と照りあふ 丈  
 階を登るそびらに日のあたり 雨  
 祝詞袋は唐錦なり 丈  
 尾を擴げ鱭はね花の鏡鯛 邨  
 山まろやかに樹々の春風 丈  
 昭和七年十二月起 九年三月満尾 雨

第四歌仙

この冬はときびしく思ひかまへたるわ  
がいたつきも年立ちかへるとともに曙  
の匂ふが如くなりぬ

たまきはる命まばゆし初手水

障子に齒朶の葉かげおほどか

鶯の来しな去にしなこそとして

石のひとつら濡らす春雨

月代の薄ら明りに雲暖く

舟にもちこむ豆腐真白き

とかくして懐硯摺りもする

神宮造りの木負萱負

霜下りし暁青き天津空

眉美しく緋緘を着て

肝高き連銭葦毛おし鎮め

葉並ゆたかに松のむら立

涼しさはいづくともなき鉦の音

人さしまねく露の隙より

薄月のうすきかげをも厭ふかに

たよりやもてる遠き雁金

花の咲く春を羊と世をふりて

缶の酒のにこる春昼

ナオ昨日けふ平安祭淋しくも

小さき家を借りてわだまし(※)

友ははや阿修羅の如き軒して

瓶の黄金の精静かなり

ささ波もたたで湛へし山の湖

耳毛に霧の凍る蓑帽子

楯の火の煙りに眼しばたき

めぐりめぐりて奇しき出合

龍雨

蘆丈

竹郵

雨

丈

郵

雨

丈

郵

雨

丈

雨

丈

郵

雨

丈

郵

雨

丈

郵

雨

丈

郵

雨

丈

郵

岩橋の岩は神代の昔より

鷗一羽ふくみ啼して

屋がくれにそれなり失せし朝の月

番鍛冶槽を洗ふ秋水

ナウ色褪せて菊も別れの乱れやう

雲に風吹く那須の黒羽

狼の糞と聞きさへ気味わるし

懐浅き端紙塵紙

花の雪井堰の水に降たまり

藁解く桑の雀口割る

昭和九年四月起 十月満尾

※ 編注・ナオ二・わだまし引越祝。茨城方言。千葉方言では新築祝を意味する。

高鳥谷奥舎

第五歌仙

頂上に径あつめたる野菊かな

土冷やかに啼き潜む虫

砧台二ツ並べし月明に

つぶりに障る軒の竿縄

北吹けば鱗凍る水たまり

何所も師走の大濤の音

ウ 普門品膝に一ツの灯を守り

蓋とる鍋の汁の煮こぼれ

犬の来て呼出す恋もおもしろや

闇は人目の関のぬけ道

筍の露ぼちぼちと露をうち

慈悲心鳥遠くなりてそれきり

断食の額に月の照りまさり

高波たたむ岩室の秋

網元の望みを満たす鯛もなし

さんざあたつた火を蹴りけす

花の山夕かたまけて風となり

けたたましくも雉子の鋭き声

ナオ菅の草鞋二三の午に摺りへらし

井ノ水貫ひにまはる裏口

雲母刷きし瓦つらりと干並べ

金色映ゆる朝光の松

白隠がいまはの笑ひからからと

合掌立に声もなき人

仰ぎ見る雲は水雨と降り変り

和倉の冬の昼の湯浸り

あたり髪切るべかりしをささへられ

袂かさねて写真かい抱く

月の影こぼるままに澄むままに

下りて砂食む砂浜の雁

ナウ手前針うちし腕の疼く冷

才非き子に学資いつまで

バス走る音に朝過ぎ夕べ過ぎ

浅間くもりの空はるかなり

ともに見る誓ひの花の空しくも

陽炎にかざし懐紙浄むる

昭和九年十月起 十年五月満尾

郵

丈

郵

丈

郵

丈

郵

丈

郵

丈

郵

丈

郵

丈

郵

丈

郵

丈

郵

丈

郵

丈

郵

下蔭三吟跋

曩に山一重を出せしわれ等は、更に龍雨居士をかたらひ、雲を隔てて吟懐をやり、病のさはりいとなみの妨げに、さへぎられつつも完了の

連句四篇を得たり。

居士はもと病弱の身ながら、この三吟にいたく打ちこみ、せめて十の完篇を得たらししかばなど洩らすところありしに、五巻目を起こすころより、沈痾とみに進み遂に初裏三句にいたりてあへなくなりぬ。あまりのことにわれ等色を失ひ驚きかなしめども、吹折られたる大木は再び起すべきよしもなければ、ともかくもあとを両吟にて続け五巻となして、下蔭三吟とは名づけつ。されど世のわづらひに忘るるともなく打過ぎて、目を経にけるが、思へば「草庵にあつても病院にゐても句を作つてゐねばわたしの命はあるまい」と構へて寂淹じやくえんの光をただよはせたる、居士が吟魂のあとを、むなしくするも惜しかれば、詠草を他石翁へ送りにて校閲を乞ひしに、當時翁も亦病臥の戸にありしが、押して初校再校を重ねくれ、やがて幾何もなくして他界したまふ。如何なればかく儂なまきことのみぞ多かる。されば二人傷心のうちに、天涯の雲を眺め徒に手を束ねて茫然とありしが、かくては果てじと再び筐底よりとうでしものの、首尾をととのへ新に、梓月先生の引を得て版行することとはなしぬ。歲月流るる如く龍雨居士が大祥忌すでに過ぎ、他石翁の小祥の忌も程経たるけふ、謹みて之を二つの尊霊のみまへに捧ぐ。翼うばくは饗まうけよとごふこと爾。

昭和十二年一月

根津 蘆 丈  
中村 竹 邨

下蔭三吟（下） 解題●前号掲載分は、昭和三十六年刊『連句集この一路』（根津芦丈著・甲陽書房）に再録されたものを底本としたが、今回は昭和十二年東京蕉風社刊、毛筆書き写真版による初版の「コピー」を参照でき、概ねそちらの表記に従った。ただし『連句集この一路』掲載の形を踏襲した部分もある。

下蔭三吟には意図的に前句同字を出した箇所がある

いなみ全国連句大会 2017 入賞作品

南砺市議会議長賞

歌仙「盆の花」

鈴木了齋 捌

二世桃径庵式田恭子宗匠の新盆に

盆の花茎もて括る野末かな

了齋

川瀬の音にまがふ秋蟬

靖子

窓に月こけし轆轤の回りゐて

有子

マウス操作は子をかまひつつ

香里

また作る十八番の五日飯

靖

一里先まで探梅の旅

齋

品川にスケートリンクありし頃

里

君の掌いつも冷たい

有

人知れず心にはのほ点します

齋

雀の歩み愛らしきこと

靖

ロボットは素直な返事すぐ返し

有

巨大な像に集ふ群衆

里

月の夜は母の形見の藍浴衣

靖

錆びたギターの弦で指切る

齋

絆創膏低刺激性伸縮性

里

靴紐締めて走る少年

有

はなびらの風紋にまた追ひ抜かれ

齋

るなど、現在の猫養会式目と異なる式目に依っているが、『季刊連句』創刊号に東明雅先生がお書きになつていふように、式目はどんなものでもいい。肝心なのはその式目を使って連句独特の詩的メカニズムを発動させること。下蔭三吟の前号掲載分について、その詩情に魅せられたという声が多く寄せられた。顧みて、我々の連句実践の鑑としたい。(編集子)

靖国祭雲の行き交ふ

靖

ナオ蝶一頭宝物殿に入り込み

有

振袖ひらと返す外人

里

あけくれに車窓の富士を楽しみて

靖

気付けば既に越えてゐる古稀

齋

スカーフと毛糸の帽子目印に

里

ネットの外で初のデートを

有

くちづけも冒険そしてその先へ

齋

にはたづみ跳びいづこへか行く

靖

どうどどど又三郎を運ぶ風

有

待ち兼ねる如煌々の月

里

この秋は糸瓜の水を採り忘れ

靖

そぞろに寒く痰からむ咽

齋

ナウ物の音の澄む頃服を迷ふ頃

里

送り迎へに赤きボルシエを

有

外つ国はイタリア以外行かぬまま

齋

千尋の海を越えつばくらめ

靖

能姿浮かび出でたる花篝

有

春たけなはの園亭に座す

里

連衆 永島靖子 佐々木有子 式田香里

平成二十八年七月十八日首尾 於 桃径庵

●第百四十一回例会（平成二十九年藤祭）が開催されました（前号既報）

昨年四月二十六日（水曜日）、亀戸天神社にて開催。亀戸天神藤祭奉納正式俳諧二十韻を神楽殿にて公開実演のち、八卓に分かれて二十韻を実作しました。当日の作品は今号二～四ページに収録しています。

●第二十七回猫蓑同人会総会が開催されました

昨年六月二十五日（日曜日）、新宿ワシントンホテル新館にて開催。議事後、七卓に分かれて歌仙を実作しました。当日の作品は今号十四～十七ページに収録しています。

●第百四十二回例会（猫蓑総会）が開催されました

昨年七月十九日（水曜日）、江東区芭蕉記念館にて開催。議事後、六卓に分かれて歌仙を実作しました。当日の作品は今号に掲載予定です。

●第百四十三回例会（芭蕉忌・明雅忌）が開催されました

昨年十月十九日（木曜日）、江東区芭蕉記念館にて開催。芭蕉忌正式俳諧二十韻興行のち、八卓に分かれて、東明雅師追善源心を実作しました。当日の作品は今号に掲載予定です。

●今後の予定

●第百四十四回例会（平成三十年初懐紙）

一月十四日（日曜日）、ホテルグランドヒル市ヶ谷にて開催予定。

十二時～十七時（受付十一時三十分）歌仙実作

●第百四十五回例会（平成三十年藤祭）  
四月下旬、亀戸天神社にて開催予定。  
神楽殿にて正式俳諧興行のち、二十韻実作

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます

・匿名 平成二十九年五月 五千元

・上野智子様 平成二十九年六月 三千元

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫蓑基金 普通預金 3376045

●猫蓑作品集第二十三号が刊行されました

平成二十九年十一月に刊行。歌仙三十九巻、源心二巻、二十韻十二巻、半歌仙三巻を収録しています。追加ご希望の方は鈴木千恵子宛にお申し込み下さい。頒価二千元（送料込み）。

●猫蓑例会に、会員間の資料交換の場を設けます

・猫蓑会員が重複所有していたり、不要になった資料・書籍などを猫蓑例会にお持ちいただき、テーブルに展示して、必要とされる会員に自由にお持ち帰りいただきます。

・俳諧関連の各種作品集、定期刊行物、書籍など。

・無償提供に限ります。

・残余の分は、必ず出品されたご本人が撤収し、お持ち帰り下さい。それが可能な数に限ります。

●猫蓑会にご入会下さい

・年会費二千元 入会金なし

●会員の転居

・竹中 壘 千葉県成田市にて転居

・宇田川清 東京都板橋区内にて転居

●新入会員

・星山百 平成二十九年六月入会

・中西静子 平成二十九年六月入会

・箭内敏枝 平成二十九年六月入会

・岩崎あき子 平成二十九年七月入会

・宇田川 肇 平成二十九年七月入会

・荒木 鑑 平成二十九年七月入会

・近藤純子 平成二十九年七月入会

・松田知子 平成二十九年八月入会

●各種募吟にふるってご応募ください

・第二十二回えひめ俵口連句大会

一月三十一日締切

形式・歌仙 応募料・一卷につき二千元

・第三十三回国民文化祭おいた2018「連句の祭典」

五月十五日締切（当日消印有効）

形式・二十韻 応募料・一卷につき二千元

●猫蓑会オフィシャルサイト

<http://www.neko-mino.org>

季刊 『猫蓑通信』第百八・百九合併号

平成三十年一月十日発行

猫蓑会刊

発行人 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町2-21-16

編集人 鈴木了斎

印刷所 印刷クリエイト株式会社